

P-273

よりよい実習環境を目指して
～臨地実習環境調査票による実習環境の調査～
前橋赤十字病院 看護部 臨床指導者会 環境調査グループ
木村 有子、柴崎 広美、鈴木まゆみ、福田 富江

当院では、看護学生の実習環境の整備や実習指導者の役割認識と指導力向上を目的に、臨床指導者会（以下指導者会）を運営し、院内15部署に於いて11施設の看護学生の実習の受け入れに対応している。各学校や学年ごとに実習形態や実習目的が多様化しているため、それぞれの学生がどの部署でも快適かつ意欲的に実習に取り組める充実した環境を整えることはとても大切となる。実習環境整備の役割を担う指導者会では、よりよい実習環境の構築を目指し、平成18年より「臨地実習環境調査票（以下調査票）」を用いて実習を終えた学生に、無記名選択式質問紙による調査を実施している。この調査票は、1. 病棟オリエンテーション 2. 指導者との相互関係 3. 実習場所の人的環境 4. 実習場所の物的環境 についての4項目を5段階で評価し、さらに学生が実習中に感じた意見や要望・評価の理由などを自由に記載できる様式となっている。

調査票は、学生の目線で実習環境を評価することを目的としているため、学生の意見や考えを単刀直入に知ることができる。時には指導者と学生の意見のギャップに気付かされることもあり、学生の求める快適な実習環境を指導者やスタッフが知るための手掛かりとなっている。また、集計結果は各部署の傾向や課題を明らかにでき、実習環境の整備に役立っている。さらに、指導者会で結果を基にした情報共有や意見交換をし、他部署での取り組みや工夫を参考にすることで、院内全体の実習環境の充実にも繋がっている。

今回、過去5年間の調査結果を考察し、現在の実習環境の評価と今後の課題をまとめることができたので、調査票の取り組みを中心とした指導者会の活動と合わせて報告する。

P-275

経験入職看護職員の支援
～フォローアップ研修と教育計画作成～
武蔵野赤十字病院 看護部

矢形 敏恵、藤原 初美、荒木 紀子、小川 圭子、西 三代子

【はじめに】当院では臨床経験のある看護職員を年間約70名採用している。質の高い看護の提供のためには、中堅レベルの看護職員の定着が必要不可欠であり、経験入職看護職員の定着も同様である。しかし、経験入職看護職員は、年齢、教育背景、経験年数、以前の職場規模や特殊性なども多様であり、看護実践能力にも違いがある。そのため、職場に適應していく支援としては、個々の能力にあった教育が必要である。そこで、当院は平成17年から経験入職者研修を導入し、平成19年から係長会での取り組みを開始し、平成22年に経験入職看護職員支援プロジェクトを発足した。

【プロジェクトの目的】1. 経験入職看護職員が同僚・上司に受け入れられていると感じ、職場に適應する。2. 経験入職看護職員が新しい職場のシステム・業務を知り、それまでのキャリアを活かせるような支援をする。3. 同僚・上司が経験入職看護職員と、共に育つ環境づくりができるように支援する。

【平成22年度の活動】1. 平成22年4～10月に入職した臨床経験のある看護職員を対象としたフォローアップ研修の企画・運営・評価2. 平成22年4～10月に入職した臨床経験のある看護職員へのアンケート調査3. 必須オリエンテーションチェックリストの作成4. 経験入職看護職員教育計画の作成5. 経験入職看護職員ステップアッププログラムの検討今回は、この活動の中から、1～4について報告する。

P-274

臨地実習における電子カルテ活用状況
長野赤十字病院 看護

鈴木 良美、清水八千代、三木由香里、小池 珠実

【はじめに】長野赤十字病院では平成22年3月から電子カルテの導入が始まり、臨地実習においても電子カルテが活用されている。電子カルテの普及は看護基礎教育の臨地実習における情報収集への変化を示唆している。今回、当院の臨地実習における電子カルテ活用状況の実態を把握することを目的とした。

【方法】調査期間：平成22年9月13日～10月18日調査対象：実習指導に当たった8部署看護師40名、2年生39名、3年生40名 調査方法：アンケート調査

【倫理的配慮】アンケートへの協力は自由意思。個人が特定できないように回収。院内の倫理幹に承諾を得た。

【結果考察】74%の看護師は、学生からの依頼により電子カルテを開いており、その回数は実習期間中2回から5回が38%であった。看護師が指導上閲覧した多い内容は、検査データ31%、フローシート22%であった。学生が電子カルテを活用しやすくする工夫をしている看護師は26%であり、その内容は電子カルテの活用を促す声掛けであった。看護師は電子カルテからの学生の情報収集について心配している一方、時間制約から電子カルテの閲覧指導はできない状況があった。学生が電子カルテを使用することに対しセキュリティ上の危惧を抱いている看護師が多い。また、学生は実習中に15分程度電子カルテを閲覧している。事前にほしい情報が明確化しているため、患者把握しやすく、実習計画・実践に生かしている。学生の90%が操作を看護師に依頼することを躊躇し、落ち着いて利用できないと感じている。印刷されたカルテは、決められた方法で処理していた。

P-276

基礎看護学実習直前に実施する地域住民参画による
対象理解のための演習の意義
姫路赤十字看護専門学校

田畑 淑子

本校では、2004年から1年次に開講する基礎看護学実習前に、学生の実習での学びが深まるための準備として、患者の一日の生活や患者の状態をイメージすることを目的に、状況設定をした学内演習を実施している。現在の学内演習は学生間で患者と看護師の役割を演じているが、患者からの反応が看護師役割の学生の推測範囲内に留まってしまっている。しかし、臨地実習では、患者の反応は多様で、学生の推測範囲を超えることもしばしばであり、現在の演習方法では、学生は学内演習の成果を臨地実習で十分に発揮できない状況が見受けられたため、演習方法の改善が必要であると考えた。その改善方法の一つとして、近年看護教育においても注目されている模擬患者を本演習に導入しようとするに至った。2009年度（旧カリキュラム）に地域住民の協力を得て演習を実施した。運営上の課題を除く、教育上の課題は次の3点であった。演習目的に学校の教育理念が反映されているか。模擬患者の定義の再検討。複数の対象の場合、学びの共有が難しく分析しにくい。検討を重ね、2010年度（新カリキュラム）に教育理念を反映させて「対象理解」「看護教育への地域住民参画」に焦点を当て、模擬患者を設定し、演習を行なったのでここに報告する。